オヤジと私

のみ としたか

あれは確か、私が二十一歳の誕生日を迎えてほどなく、晩秋の北九州へオヤジと旅した時のことである。

当時オヤジは、血液型シリーズの第1作となる「血液型でわかる相性」の執筆直前で、そのための取材やら資料集めに忙しかった。

私は大学での単位取得も順調に進んで、暇を持て余している学生だったから、人をコキ使うことにかけては人に落ちない、現場の親方みたいなオヤジにとって、恰好の標的であり、クルマの運転、雑用、テープ起こし、何でもやらされるハメになったのである。

その時は、ある相撲雑誌のインタビュー記事の必要から、相撲部屋の親方夫妻を訪ねることになっていた。通常なら、東京両国辺りにある部屋へおじゃまするところ、たまたま十一月の九州場所中ということで、遠路福岡まで行くことになった訳だ。

「オイッ、ケン坊！九州までクルマで行けるかい？もちろん、神戸からフェリーに乗っかるけどサ・・・」

現在なら、何も好きこのんで、延々とクルマ、船を乗り継がなくたって、新幹線のぞみで一気に博多まで快適な旅が出来る。

しかし、オヤジはどうしてもクルマで行きたい訳がある。せっかく九州くんだりまで足をのばすんだから、ついでに他の仕事で必要な取材も兼ねて、大分の日田市にも寄って、それから、佐賀の唐津城も見てきたいし・・・エトセトラ、エトセトラ。

とにかく、ついでに、あれもこれもが大好きなB型である。その上、彼は〝未練がましいB型でもあったから、旅をする時に、とてつもなく重いバックを持って行くのが、常であった。

仕事に必要な資料やらノート、身の回り品だけなら大したこともないのに、行った先で〝もしかして、これも必要になるかも・・・・〟あれを持ってきておけばよかった！〟というような、未練の後ろ髪に引かされて、結局は一度も手にしない本や資料のバインダーがバッグを占領する。

自分だって軽快に動きたいから、その石のように重いバッグは持ちたくないし、私に持たせるのも、ちょい気が引ける。

B型の目移り、気移り、未練がましさ、自由自在に動き回りたがる癖・・・みんな一緒くたになって、どこに行くにも、クルマと私にご指名がかかるという次第である。

「いいよ！クルマも新しくしてもらったしネ、慣らし運転で遠出するなんて、グッド・タイミングだよネ」

「親方は場所中で忙しいから、あさってのお昼２時間だけ空けてもらったんだ。明日の夜神戸からフェリーに乗れば、あさっての９時には小倉港に着く、お昼までに福岡市内に入ればいいから、楽勝だな！」
いつものことで、慌ただしい旅のスタートである。

旅の半分は船に乗るにしても、ともかく、長いドライブになる事は間違いない。１週間前に納車されたばかりのクルマには、当時としては豪華装備の８トラック・カセットコーダーがあり、私は小使いをはたいて、映画音楽２０曲の入ったソフトを買い込んだ。
この、たった１本しかない貴重なカセットが、この旅であっけなく、その役割を全うすることになろうとは、この出発の日には予想もしなかったことである。
スタートは朝の９時、都内の渋滞を抜けて東名高速の用賀インターに入ったのは、１０時を回っていたと思う。
料金所を通過した途端、クルマは猛然とダッシュする。当時の私はかなりのスピード狂で、追越車線に乗ったきり浜名湖サービスエリアまで突っ走ったと言えば、その怪速？ぶりが想像出来るだろう。
東名高速が現在ほど混んでいなかったこともあるが、通行帯違反でハイウェイ・パトロールのご厄介にならなかったのは、ほとんど奇跡に近い。
Ａ型は、日常のストレス発散も兼ねて、クルマのスピードによる開放感に浸る傾向がある。特に免許取得後１～２年が、その盛りであり、そのうち、ヒヤッとすることが何度かあったとか、実際に事故を起こして、深く悔い改めるタイプが多い。
その頃の私も、免許を取ってちょうど１年ぐらい。今考えてもゾッとするような、バリバリのスピードマニアだったのである。サービスエリアで、慌しいランチを済ませると、あとは一気に大阪の吹田インターまで走りきるという、まことにハードなドライブに、さすがの私も疲れきった。
助手席の背を目いっぱい倒して、さっきまで高いびきだったオヤジは、京都を過ぎて山崎の天王山にさしかかる頃、やっと起きたようで、辺りの景色を見回しながら、時計に目をやる。
「オイッ、もう、京都過ぎたのか？こりゃ大阪まで５時間きるぜ！」
記録への挑戦が大好きなＢ型である。それでなくてもヤル気満々の私を、けしかけるのである。
結局、この高速ドライブは、Ｂ型の励ましとＡ型の意地によって、見事！？大阪吹田の料金所に４時間５４分で飛び込んだのであった。
国道に下りてから神戸までは、さすがにゆったりドライブである。この調子だと、

神戸港から出航する小倉行きのフェリーは、夜の１０時スタートだから、時間はタップリある。夕食前に、芦屋に住んでいるオヤジの叔母を訪ねることになった。
思いつきで寄り道をするのが、何より大好きなＢ型である。オヤジにとっても、何十年かぶりであり、私にとっては見たこともない老人だが、有名な芦屋のお屋敷界隈を一度は見ておきたかったから、むろん異存はない。か？

芦屋までのコースは、地図とにらめっこのオヤジが、張り切ってナビゲートする。私は自分の方向勘みたいなもので、どんどん走りながら、そっちの方角へ近づくというタイプだ。いちいち地図で確認するために、路肩に寄せるよう命じるオヤジに、多少イライラしてしまう。「さっき通り越した信号、曲がるんじゃないのか？」
まだ地図には載っていない、バイパスの標識を素早く確認していた私のほうが、正しいこともある。逆に、勘に頼っての思い込みが外れて、川べりの行き止まり……いまいましく逆もどりするケースもある。「見ろ！やっぱり、さっきの所だった…」
勝ち誇ったオヤジは、地図をこれ見よがしに広げながら、私に同情するゆとりさえ見せたりする。いい弥次喜多道中である。
何かとすったもんだはあったものの、ともかく芦屋の邸宅にはたどり着き、望外の歓待を受けた。叔母さんは、もう８０近い年齢にもかかわらず、話しことばも明快で足腰もシッカリしており、手ずからお茶とケーキを運んでくれる。
「まあまあ、よく忘れないで……マーちゃんも偉くなったねえ。こちら、息子さん？大学生なの？よく来てくれました」
輝くような白髪で、いかにも上品な芦屋夫人という風情である。マーちゃんというのは、出身地金沢の本多町で鼻たれだった頃の、オヤジ正比古の愛称である。
この老夫人、血液型はＯ型であり、どんなにしばらくぶりでも、見たこともない若者であっても、身内に連なる者となれば、そのまなざしは、とても温かい。
やれ泊まっていけ、せめて夕食だけでも、強引な程に熱心な誘いを断わるのは、至難の技であった。明日のお昼までに、何としても博多に行かねばならない理由を懸命になって納得させ、フェリー出航の時間も、ちょっぴりウソをついたのである。
その日、オヤジも私も、どうしても神戸三の宮にあるレストランで、ステーキを食べたかったのだ。とにかく、食べることに、かなりこだわりを持つＢ型のオヤジは、おいしいものがあると聞けば、どこまでも遠征するし、また、家族にも食べさせたがった。
ある日、オヤジがしみじみと言ったものである。「オイッ、ケン坊、オレがあと１０年生きるとして、３６５０日だろ？まあ、１日２食と計算しても、７３００食だぞ…４００字詰の原稿用紙にすりゃ、１８枚とちょっとだ。旨いもの食わなきゃナ！」

それ以来、私は食事をする度に、原稿用紙のマス目が浮かんできてしまう。
人のいい叔母さんを、何とかなだめ、だまくらかして、お屋敷を辞したのは7時頃だったから、神戸三の宮のステーキ屋まで、相当に飛ばしたのは言うまでもない。

念願のステーキにはありつけたし、食後のコーヒーも旨かったから、ふたり共幸せの絶頂であった。〝禍福は糾える縄の如し〟こんな時に悪い事が起こるものである。
すっかりご満悦で、フェリー乗り場に着いたのは9時20分だから、余裕である。乗船手続きはまだ始まっていないらしく、埠頭の周辺は静かで、駐車スペースにもクルマはまばらだ。「一番前に停まっていれば、係員が声をかけてくれるだろ……ちょっと、ひと眠りしようや」
オヤジは早くも背もたれを倒している。「ここ、第8ゲートだから、間違いないよね」私も慎重なわりには、思い込みが激しい。ふたり仲良くシートに寝そべって、静かな波止場のムードに浸りきっていた。
30分も経ったろうか。間もなく10時になろうとしている。出航は10時20分とチケットに書いてあるから、さすがにおかしい。
桟橋に人やクルマの気配もなく、船の入ってくる様子もないのである。「多少遅れるのかな?ゲートの前に人が居るから、ちょっと聞いてみるよ」
私がクルマから出て行くと、さっきまで鼻唄うたって極楽とんぼだったオヤジも、気になって窓から顔を出している。「オヤジ!マズイよ!ここ違うんだってサ……」
ダイヤモンド・フェリーの8番ゲートと確かめて、すっかり安心しきっていたのが大間違い。ゲート前で荷物を運んでいた係員が、気の毒そうに、なかば呆れ顔で教えてくれたものである。「小倉行きは、ここじゃなくて、クルマで15分くらいかな?ポートタワーに近いほうの埠頭ですよ……よく間違えるんだよネ。あっちはダイヤモンド・オーシャンフェリーだから」
大変な事になった。よく考えれば、九州までの長距離フェリーである。クルマや荷物の積み込み、乗船客だって多いんだから、少なくとも1〜2時間前から、桟橋が騒然となるのが普通で、この静けさに酔って20分前になるまで呑気にしているふたりがオカシイ!
オヤジはボウ然として、「どーする、ケン坊……」「とにかく、あっちに行ってみよう!」

「ブォーッ! ブォーッ!」
警笛を鳴らしながら、フェリーの船体がゆっくりと岸を離れて行く。手を伸ばせば、

まだ届きそうな、あまりにも無情な光景に、ふたりは言葉を失って、岸壁に立ちつくしていた。
「オーイ、船を返せーぇ」
渡し舟じゃないんだから、舟頭さんに向かって叫ぶわけにもいかず、ただ暗い海の闇に溶け込もうとするフェリーを、見送るより他になかったのである。
１０分も、そうしていたろうか。
「なあ、ケン坊・・・・しょうがないよ。親方に電話して、明日の取材をキャンセルしよう。別の日に変えてくれるかもしれんしな。どっかのホテル、空いてるだろ・・」
「・・・・・・・」
無言の私をなだめにかかる。ついさっきまでは、目いっぱい人をなじっていたのに、である。もう少し早く聞きに行ってりゃな、とか、場所中で、親方、なかなか時間とってもらえないんだぜ・・・・・私が人一倍責任感にさいなまれる男だと知っているから、ひとり言のようにつぶやくのだが、B型の未練がましさは押さえ切れない。
しかし、舟が遠くへ去った今、気分転換が早いのもB型の特徴である。
「ケン坊、そうしよう！神戸に泊まってさあ、明日、何か別のフェリーがあるんだろ？」
こうなると、A型の私のほうがしつこく、意地っ張りである。
「このまま、九州まで車で行こうよ！明日の朝まで山陽道を走り続けりゃ、お昼の約束に間に合うし・・・」
呆れ顔のオヤジは、「そんな、無理しなくていいよ。寝ない訳にいかないだろ・・・・ホントに大丈夫かい？」
この意地っ張りなら、やるかも知れんと思った途端、もう半分くらい、フェリーとの競争に興味が移っている
B型である。
「岡山あたりで、ひと休みすりゃいいかな？こんなことなら、店が閉まる前に食いもの買っておきゃよかったな、眠気覚ましにさ・・・」
私も、心中秘かに、逃がしたフェリーが小倉港に着くより、5分でも早く関門トンネルを渡りきる覚悟に燃えていたが、オヤジも、もうすっかりその気である。
神戸市内を抜けて、国道2号線、いわゆる山陽道に入ったのは、もう１１時を回っていた。
己の失態を取り返して、予定通り明日の取材に間に合わせるんだ・・・使命感に燃えるA型は気力も充実、高速じゃないから思うようには飛ばせないが、長距離トラックを追い越し、追い越し、快調なドライブである。
フェリーとのレースにその気になっていたオヤジは、神戸を出て1時間もしないうちに高いびきだから、話し相手も居ない。こんな時のためかどうか知らないが、大枚

はたいて買った8トラックの映画音楽のカセットは、A面B面行ったりきたりして大活躍であった。

高速道路を走っている時は、京都東まであと52キロなんて言っても、ものの20～30分で何の苦にもならない。ところが、国道となると大違いである。深夜のことて、結構スムーズに流れているとは言っても、かなり前に広島まで182キロという標識を見たハズなのに、次の標示では158キロ・・・ウンザリしてしまう。

既に爆睡状態のオヤジの寝顔を、いまいましく思いながら、「自分で言い出したことだ・・・意地でも九州にたどりついて見せるぜ！」

さっきから、A面B面行ったり来たりの映画音楽にも、かなりウンザリしているのだ。しかし、今はこれだけが睡魔との闘いの、唯一の味方である。

白々と夜が明けた頃、広島市街を通過しながら、キナ臭くなってボーッとした視野に、原爆ドームがかすめたような気がしたが、あれは夢かうつつか今でもわからない。

市電のレールにハンドルを取られないよう、敷石の凹凸に、揺れながら走っていたことだけ鮮明に覚えている。

眠気というのは不思議なもので、極限を何とか凌いでしまうと、多少頭もハッキリしてきて元気が回復する。呉や岩国や防府といった地名を、標識で確認する度に、何となくワクワクするもの

があり、とうとう下関が間近に迫ってくると、もう気分はルンルンで、

「ねえ・・・ねえ！関門トンネル、もうすぐだよ！」

オヤジの肩を揺すり、ほっぺたを指で弾いて起こしにかかる。

「何？何だ、もう九州か？トンネルくぐっちまったのか！」

まだ十数キロあることを伝えると、安心したように、またひと寝入りしようとする。いい気なものである。

高校の修学旅行で、寝台車で眠りこけている間に通過してしまった無念さを、今度こそ晴らしてくれようと、私にとっては特別な海底トンネルなのだ。

むろん、オヤジにとっても初めてのハズであり、共に興奮しながら、クルマはゲートをくぐり加速する。トンネル内のオレンジ色のライトが、フルスピードで後方に飛び去り、10分、15分・・・たぶん20分とは走っていなかったと思う。

前方にポッカリと陽の光が見え始めると、もう、そこは九州の門司であった。何とも、あっけないものだ。二人の興奮も消化不良のようで、思わず顔を見合わせてしまったものである。

それでも、とにかく、ここは九州なのだ！ゆうべ、あのいまいましいフェリーを神戸港で見送ってから、ろくに仮眠も取らずに走りきり、とうとうフェリーを追いぬい

たのだ！
「船が小倉港に着くのは、まだ３０分後だぞ、やったな、この意地っ張り・・・」
テレ屋のオヤジの最大級の讃辞であった。

博多の街中にある旅館について、ほっとひと息入れると、張りつめていたものがいっきに緩んだのか、ものすごい眠気である。オヤジは、昼過ぎの取材まで、ゆったり資料を整える時間もあって、ひどくご機嫌であり、
「ケン坊、早く寝ろ！たぶん６時過ぎにはもどるから、それから中州に出て水炊きでも食いに行こうぜ・・・」
しゃべり好きと、親バカが一緒になって、口の軽くなったオヤジから、さんざ私の武勇伝？を聞かされた旅館の女将は、慌てふためいて、別室に床をしつらえ、
「さあさ、休みんしゃい、休みんしゃい・・・東京から３０時間もなあ、ほんなこつ・・・」
それから夕方まで、時間にすれば４～５時間くらいだろうが、この時ほどグッスリと深い眠りについたことはなかったろう。何でもギリギリまで我慢して、耐えに耐え抜いたその後に、楽しみが待っているというのが好きなタイプある。
Ａ型によくあるストイックな傾向が、私には特に強いのか、日常のつまらぬ事にまで発揮されたりする。
例えば、雨のドライブでワイパーをギリギリまで動かさない。フロントガラスをいっぱいの水滴が覆い尽くして、ほとんど視界が効かない、まさにその時に、一気にワイパーが振り払う時の快感たらない！（ちょっとヘンだよね）
目が覚めると、外はもう真っ暗である。部屋の隅にあるテレビをつけると、丁度相撲の結びの一番だったから、午後６時近くだったのだろう。
よく眠ったから、体はスッキリしているのだが、アタマのほうが少し変である。朝まで寝てしまったような、夜中のような、何だかよく分からないボンヤリした状態で、まるで時差ボケのような感じなのだ。
とにかく夢遊病者のように風呂場に行き、熱いお湯をたっぷり浴び、何と６０時間ぶりにシャンプーをしたところで、やっと自分の身体と魂が一体化したようである。
風呂から上がって部屋にもどると、ちょうどオヤジがもどっており、
「もう起きたのか？よく眠れたろ！おとといから走りづめだもんな・・・アンタの頑固にはシャッポぬいだぜ」
照れ屋のＢ型オヤジが、精一杯の誉め言葉である。
いっぷくして着替えをすると、早速ふたりで夜の博多にくり出した。名物の水炊きで腹ごしらえである。

路地ウラにあるその店は、今日会った相撲部屋の親方の紹介だそうで、いかにも老舗の趣があり、やり手の女将はＯ型であった。
Ｏ型の彼女にとって、家族同然の親方の懇意は、親愛に足る仲間であり家族も同じ・・・まるで母親のような口ぶりで水炊きの美味しい食べ方を教授したり、挙げ句には私の器に手をのばし、鳥肉の骨まで取ってくれようとする。これは、ちょっとやり過ぎなんじゃないか。

何でも〝ついで〟が大好きなオヤジのことである。その上、予定していたスケジュールも、その場の思いつきでクルクル変えて楽しむ癖もあるようで、
「ケン坊、明日の唐津城な、・・・ひとりで行ってこないか？博多のラジオ局に、昔世話になったプロデューサーがいるんだよ。久しぶりに会っておこうと思ってさ」
翌日は、結局別々に行動することになり、私はひとり佐賀県の唐津まで、自由気ままなドライブを楽しむことになった。
Ｂ型は仲間はずれには敏感で、こちらが勝手な行動をするのを嫌がるくせに、一緒に旅などしている途中、時折別行動を取って何時頃どこどこで待ち合わせる、なんていうのが好きである。
この日、旅館で朝食を済ませ、出かけに決まって腰の重いオヤジを残して、私はさっさとクルマに乗ってスタートすることにした。
「夕方５時頃にはもどるつもりだけど・・・どこかで待ち合わせる？」
「・・・う～ん、ケン坊より遅くなりそうだったら、この女将に伝言しておくから、ラジオ局のロビーまで迎えに来てくれるか」
鼻歌まで出て、オヤジはすこぶるご機嫌である。ついでにアレコレ面倒くさい用事を頼まれないうちに、手でＯＫサインを出した私は忍者のような素早さで旅館を出たのである。
駐車場まで見送ってくれた女将に、キーホルダーからスペアーを外して預けておいたことが、この後、不幸中の幸いとして我が身を救うことになろうとは・・・。
唐津までの道程では、虹の松原と呼ばれる美しい海岸線をぬけて行く。どこまでも続く緑の松林の向こうに、キラキラと輝く海が広がっていて、全身に清々とした気がしみわたるみたいだ。
昨日まで悪戦苦闘しながら、ガマンの旅をして来ただけに、Ａ型の私にとっては殊更に極楽だったのである。穏やかに晴れ渡った佐賀路を、ピタリ６０キロの制限速度でゆるゆると流していると、ロータリーエンジンのなめらかな回転に眠気さえ催してくる。
玄界灘を望小高い丘の上に、めざす唐津の天守が見えて来なかったら、危うくいね

むり運転をするところであった。脇道にそれて見学者の為に設けられたパーキングに乗り入れる。
　クルマはピカピカの新車だし、天気も上々で、おまけに憧れの唐津のお城は目の前にある。これで浮かれぽんちにならなかったら、おかしいよね。
虹の松原の美しさに酔い痴れ、心地良いドライブに眠気を誘われ、夢見心地で頭もボーっとしていたに違いないのだ！愛用のカメラを片手に颯爽とクルマを降り、勢いよくドアを閉める。
　心は天守閣の向かう石段を、一気に駆け上がっているのだが、虫の知らせ？と言うのだろうか、イヤな予感と共にクルマの中を覗くと、無情にも〝やはり〟キーがさし込んであるではないか！
　クルマを降りるとき、無意識のうちにドアロックを押し上げてしまったらしい。押せども引けども、当然の如くドアは開かないのである。
　何というトンマ！アホ！ドジ！ジーザス・クライスト！ファック・ユー！あらん限りの世の無情を呪ってみても、キーはガラスの向こう側・・・天国から地獄へとは、真にこの事であろう。
　ガラスを割る、鍵を壊すなど、それこそもっての他である。なにしろ、ピカピカの新車なのだ！薄い定規でも差し込んで、ガラスのすき間からロックを外す名人芸など、私にある八ズもない。
　大声で泣きわめいて助けを呼ぶことは、A型のプライドが許さないし、こんなひなびた所で、寸分の小キズも付けずにロックを外してくれる魔法使いが見つかるとも思えない。
　ここで、ついに私は観念した。
　ふるさと東京を離れて一千キロ余り・・・無念にも、ここ唐津城にて足を失い、茫然自失して天下に恥をさらすとは・・・。
　A型は心配性、苦労性だが、どうにもならない所に追いつめられると、開き直りとも言える落ち着き？を取りもどすものである。
　私は、クルマの事を頭から追いやって、ともかく丘の上にある城をめざして、石段をゆっくりと上がる。こんな不幸の真っ只中で、悠然とお城見物が出来る自分はエライ！なんて思ったりしながら、ポカポカ陽気の中を進むうち、石垣のすき間から白い波しぶきが見えかくれして、やがて真っ青な海が目の前にひらけた。
　これが子供の頃から憧れた玄界灘である。何だか知らないが、この〝ゲンカイナダ〟という音の響きに惹かれるのである。東シナ海というのも好きだ。私の前世は、かつて大海原に帆を膨らませた海賊船に乗り込んでいたかも知れぬ・・・。
　そんな取りとめの無い事を想いながら、じっと海を眺めていると、俗世の煩わしい

ことどもが、もうどうでもよくなってくる。私の好きな歴史小説家のひとりに、白石一郎がいて、彼の海洋ものでよく表現されるのだが、「海の青を、そのまま空に放り上げたような・・・」そんな爽やかな青空と海との境目が溶けて分からなくなっていた。

小一時間ほど男のロマンに浸りきっていたのだが、やはり俗世の悩みに引きもどされる時はくるもので、己の大失態の始末をどうつけるか？ぼんやり考えながら石段を下りるうち、ハッと閃いたのである。

旅館の女将にキーを預けてあるではないか！これぞ天の助けでなくて、何であろう。にわかに私の頭は目まぐるしく働き始め、博多までの長距離バスの位置：反応は素早く、その日の運行ダイヤにも恵まれて、まだ西陽がさす時刻に旅館にとって返し、見事スペアキーをこの手にしたのである。

訝しがる女将には、口から出まかせの言い訳で煙に巻いて、伊万里に向かうバスに乗り込んだ時ほど、ホーッとしたことはない。

夕暮れせまる虹の松原は、本日３度目の通過となる訳で、〝オレは一日中、何をやっているんだろう？〟

疲労でグタリとした体をシートに沈めながら、空しさだけが募ってくる。唐津城の次は伊万里にも寄って・・・そんな、のんびりとした佐賀路漫遊の一日になるハズだった。

唐津のバス停から駐車場まで、どっぷりと暮れた県道をトボトボと歩きながら、後悔と安堵が頭の中を行ったり来たりしていたが、いざ愛車のシートにおさまってみると、もう幸せ一杯！

やっぱり旅はクルマである。

旅館に着いたのは、午後８時を少し回っていたと思う。さぞかしオヤジハは怒り狂っているだろう・・・覚悟を決めて部屋に入ると、女将がお茶を入れながら、

「どこまで行きんしゃったとね？さっきおとうさんから電話がありましたと」

ラジオ局の知人たちと夕食を共にすることになったから、もどりは９時ごろになるという伝言だったらしい。

まずは喜ばしいことである。オヤジは自分の都合や思いつきで、予定を変えたり、人を待たせたりするのは頓着しないのに、相手の勝手にはあまり寛大ではない。すぐにイラつくのである。

Ｂ型は自ら勝手気ままに動きたいのに、相手のマイペースには腹を立てるという癖がある。Ｂ型どうしが付き合うと、当初トラブル原因のほとんどは、互いの勝手にイ

ライラするということなのだ。
　もちろん、どの血液型にも〝自分のことは棚に上げて〟相手にイライラする癖はある。O型など、自己主張はハッキリしていて、前に前にと出たいほうなのに、人の出しゃばりを最も嫌うのである。
　自分の理屈と言い分は頑として譲らないA型が、相手の言い訳がましさを嫌がり、批判分析好きのAB型が、自分が批判されると腹を立てるのも、同じことで、人間とはかくも勝手な生き物なのである。
　踏んだり蹴ったりの一日だったと思っていたのに、天はまだ我を見離さないようで、何という絶妙なタイミング！シャワーを浴びて、身もココロもホットした頃に、オヤジは機嫌良くもどってきて、
「ケン坊、メシ食ったか？悪かったな・・・唐津は行ってきたのかい、どうだった？」
「・・・うん、ちょっと長崎の県境まで足をのばしたもんだから、ボクも帰りは遅くなってね、ついさっきもどったんだ・・・」
プライド高いA型としては、旅先での大失態と空しい駆け回りの一部始終を、今ここで告白する気分には、どうしてもなれなかったのである。自分でも空々しい作り話で、
「唐津城から眺めた玄界灘は、それはすばらしかったよ！（これはホント）それから伊万里焼の里に行ってね、大皿のいいのがあってさ、色づけがきれいなんだ、欲しかったけど高くて・・・朝鮮の影響が強いんだろうなあ」
陶器などにさしたる興味など無いのに、この時の私は異様に多弁であった。佐賀から長崎に向けて、それは快適な？ドライブの模様を報告しながら、〝まるで、見てきたような話し〟とは、こういう事か、と思ったりした。
　事の真相は、東京にもどってから暴露することになるのだが、この時は、何とも有意義で楽しげな一日を過ごした息子に、多少の嫉妬を覚えたのか、オヤジの機嫌は少しずつ下降する。
　それだけ、私のウソが真に迫っていたということか、B型のひがみ根性が、真実を見ぬく目を曇らせていたのか・・・。
　ともあれ、対抗意識を燃やしたオヤジは、
「あしたは、大分の日田に行くぞ。ケン坊、日田を知ってるか？〝ひた〟だぞ、その昔は天領と言ってな、租税を免除された尊い村なんだぜ。九州の小京都と言われて、その雅さったら無いんだ！」
私はいつもより素直に相槌をうち、心の底から日田街道をホントにドライブする楽しみに、心を躍らせたのである。

（２０００年、東京都内の事務所にて）